

まえがき

この本を手にしてくださったみなさんは、多かれ少なかれお子さんの国語力に不安な思いがあり、なんとかその国語力を伸ばしてあげたいと考えていらっしゃるのではないのでしょうか。それは2人の娘を授かり、新米ママだった私が10年以上前に感じたのと同じモヤモヤした気持ちなのだろうと思います。

「日本語を話せるのに、国語ができないってどういうこと？」

「大きくなればもつと言葉も覚えるだろうし、そのうちにできるようになるのかな？」

「いやいや、ほうっておいたらとんでもないことになるのでは……」

「他の科目と違って暗記すればなんとかなるわけでもないし……」

「国語って何をどうやって教えたらいいいのかわからない！」

そして、もしかしたら私のように、すでに数冊の国語の参考書を買って求めて、一通り目を通してはみたけれど、「この方法は難しすぎる。とても続けられない……」とためいきをついたことがあるかもしれません。

ひと昔前は、国語なんて特に勉強する必要のない科目でした。ところが、ここ数年、多くの国語の参考書が本屋さんに並ぶようになったことからわかるように、「国語のできない子どもたち」が確実に増えているのです。私の小さな個人教室にも入室をお待ちいただくほどのお問い合わせをいただくようになったことから、お子さんの国語力に対する「不安」や「心配」が募っていることが感じられます。



私が生徒にも国語を教え始めたのは、今から十数年前。最初の生徒は小学1年生になったばかりの長女でした。現在の私の指導法からは程遠く、市販の国語ドリルを買ってきては毎朝数ページずつ解かせるだけの頼りないお母さん先生でした。それでも、長女はすぐに1学年上の問題集にも取り組めるようになりました。言葉を早くから話し始めた彼女は、自分の思ったことを幼いなりに言葉で説明しようとしています。おとな顔負けの屁理屈をこねるので、こちらの思いに従わせるのが難しく、幼い頃は親にとっては『手のかかる子』でした。

1年後に年子の次女が小学校に入学しました。長女とは正反対の性格で、強く自己主張をすることもありません。いわゆる『扱いやすい子』です。ところが、何かを質問しても「わからない、もう聞かないで」と深く追及されることを嫌い、長女が難なくこなした国語ドリルを解かせてみると、何かが違うのです。まったく解けないわけではないけれど、ちよつとズれている。月日がたつにつれてその微妙なズレが顕著になってきて、正直なところ焦りを覚えました。そして、次女の国語の解き方をじっくり観察してみても気づいたのです。「この子は解けないのではない、読めていないのだ！」それから私の本格的な国語指導の研究が始まりました。

家庭で国語を教え始めて2年が過ぎた頃には、次女も好んで読書をするようになり、やがて国語は得意科目となりました。長女はともかく次女までが国語ができるようになるなんて！この事実が一番驚いているのは、彼女の幼少期を知る夫です。

娘たちに施した指導法をもとに、近所の子どもたちにも国語を教えるようになり、口コミで生徒さんたちがどんどん集まり、自宅の一室がいつのまにか国語教室となりました。住宅街にひっそりと佇む小さな国語教室には、夕方になると毎日のように幼稚園から高校生までの子どもたちが集まります。

こうして我が子以外にもたくさん子どもたちに国語を伝えてきて思うのは、「本当に国語力って大切！」ということ。すべての学力の土台になるからというのも理由のひとつだけれど、それには別のわけもあります。それは、国語力は人間同士のコミュニケーションに大きな力を発揮するから。

人はひとりで生きているわけじゃない。毎日たくさんの人と関わり合い助け合いながら生活しています。友人関係でも仕事関係でも、人と付き合う上でコミュニケーションをとらずにすませるなんてことは、まず不可能です。相手の気持ちや言いたいことを正確に読み取り、自分の考えをしっかりと伝える。それはまさしく国語力そのものです。

ただ一方的に言葉を伝えるのではなく、思いを共有できてこそ、人は互いにわかり合えたと感じます。コミュニケーションは言葉のキャッチボールと言われるように、飛んできたボールを受け損なえば、相手の思いを理解できないことになるし、コントロールが利かなくて暴投してしまうと、自分の思いは相手に届きません。幼い頃から言葉のキャッチボールを楽しみながらコントロール力を磨くのは、生きていく上でとても大切なことだと思います。

私は大学で英語教師の資格をとるための課程は履修しましたが、国語に関しては手探りで独学を続けています。そんな私だからこそ、「プロの指導法をそのまま家庭で実践するのは、多くのお母さんにとってはハードルが高いのでは」と気づいたのでしょう。その道の専門家と子どもとでは、知識にも理解力にも差があります。教える側と学ぶ側の隔たりは小さいに越したことはありません。

何人もの子どもたちに国語を教えるうちに、おとなが「わざわざ説明する必要はない」と思っていることの多くを子どもは理解していないという事実に気づきました。理想論では解決しきれないたくさん壁に突き当たり、悩んでは考え、子どもの理解度や思考力と同じレベルに立つことで、子どもとおとなの隔たりを埋める指導法を作り上げてきました。そして、そうすることで私自身も立ち止まることなく学び続けています。

親は一日中子どもの勉強を見てやるわけにはいきません。親業以外にもやることは毎日たくさんあるのです。でも、子どもの国語力を伸ばすには今しかないというのも事実です。そのためにも、「国語力を伸ばせない子どもたちの背景にあるものを丁寧の説明しよう。そして、国語で困らない子になるために、家庭で無理なくできることを伝えたい」と思ったのです。

そんな思いで綴るこの本では、国語だけに留まらず、子育てについても触れることになりました。なぜなら、育児と国語力の育成は、切っても切れない強いつながりがあるからです。

根本原因もわからないままやみくもに問題集を解かせても、できるようにはなりません。できない理由を知った上で、順番を間違えることなく手当てをしつかりしてやれば、力はいってくるものです。子どもが中学生になってから親が勉強を教えるのは、はつきり言ってかなり難しい。後々国語で苦労しなくてすむのであれば、幼いうちに時間を費やし教え導く価値は十分にあります。

まずは日常生活をちよつと見直すことから始めてみてください。今子どもの国語力に不安を感じていたとしても大丈夫！「国語教育についての本を読んでみよう」と思ったこの時点で、すでに『はじめの一步』を踏み出しているからです。そして、その一步は力強い一步なのです。目的地の半分までたどり着けるくらいの大きな一步なのです。

この本を読み終えたみなさんが「今日からできることをひとつでもやってみよう！」と思い、ワクワクした気持ちで二歩目を踏み出していただけたら、そして、ひとりでも多くの子どもたちが「国語は得意！」と思うようになってくれたら、こんなにうれしいことはありません。